

第Ⅲ節 この説教学の課題、構成、構造

A) 一般的な説教論の課題の素描

1) 説教学は、「信仰の言語論」

「言葉の喪失状況」VS 「父祖、改革者たちの信仰告白」

■ 説教論は、信仰が語りうるように助けを与え、これ（信仰）にみ言葉を理解するための指示（示唆）を与えることを試みる。

■ **説教論は、「信仰の言語論」**として把握しうるもの。

2) 説教学は「希望の言語論」

人間の言葉の喪失状況は、神の沈黙と切り離せない。

だが、信仰は、神の沈黙に対して、「それでも神は語られる」という約束に固執。この確信こそ「神の言葉の説教は、即ち神の言葉である」という信仰告白ではないか。

■ 説教者は、み言葉において神を捉え、神ご自身が再び語られるようにする。

■ 改革者たちが語った「である est」は、「なる werden」でもあるべき。

■ 我々は、「今語られる説教」の中で、神のみ言葉が約束（神の言葉の説教は、即ち神の言葉である）に従って行われる（神の言葉になる）ことを問いたす事で説教の準備をなし、この「なる」という神の御業に仕えようと試みる。説教する者は、神の将来を尋ね求める。

■ 説教学が説教の準備をする時、説教の中にある終末的なもの (das Eschaton) を問い、終末的なものが有する説教の意義を問う。説教学は、神が語られるということ、**神は今来たりつつあるお方であるが故に、語ることの中で神が来り、語られるのだ、**ということを目指して教える。■ **説教学は、希望の言語論**

3) 説教学は「愛の言語論」

神が沈黙され、言語喪失状況に沈んでいる人類は、愛を失っている。説教者をして、信仰と希望の言葉を語るべく助けようとす

る説教論は、そうする事で**神と人間に対する愛の学校**となる。

神の言葉の出来事は、「**神ご自身が人間に語ってくださる**」という出来事であるが故に、そこで語るべき方（神）を愛し、その言葉が向けられている人々（隣人）を愛するやり方しかありえない。

■説教は、説教者のために、二つの愛の戒め（心を尽くし精神を尽くし思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい／隣人を自分のように愛しなさい）を解釈するもの以外ではない。最大の戒めは説教論に於いてこそ愛の戒め。

■この愛が希望に言葉を与え、言葉に力を与える。説教を愛の戒めに入るための修練と理解すれば、説教は自由の空間を開く。

■**説教は「愛の言語論」**として理解されねばならない。一切の説教は愛の中にこそ完成を見出す。ここでも、愛は「**律法の完成**」（ローマ13：10）。

だが、我々は二つの愛の戒めに対し罪を犯すものであり、それが続く必然性もある。我々が完全の状態の中で生き続けるなら、如何なる指示も必要ない。説教は不要となる。

4) 説教は、「キリスト者の言語論」

説教論を、信仰と希望と愛の言語論と把握すると、説教論をキリスト論的ではなく、聖霊論的に捉える事になる。それは極めて魅力的だが、**安んじて行うには賢明ではない。**（“安んじて行う”とは？安易に行う、という事？”¹）律法主義的になるか、律法主義的に誤解されるか、抽象化の中で自己を見失うか。神の祭司の民（万人祭司？）のための言語論が必要となるような**将来には**、信仰と希望と愛の言語論を企てる事が出来るし素晴らしい事だろう。だが、**現在**、そのように試みれば、教会員すべてのための信仰と希望と愛の言語論の特殊形態でしかない。それほどまだ成熟していない、ってこと？ **特殊形態とは？**

■**説教論は、キリスト者の言語論。**説教者を助け、会衆の言語教師

¹ 当時のドイツで盛んにおこなわれた敬虔派の説教論を示している

となり、キリスト者をその言語喪失の牢獄から解放しうるようにしてあげるべき。

※「信仰・希望・愛の言語論」のパーспекティブではなく、「キリスト者の言語」というパーспекティブへの転換が行われている。

※「説教者は言語教師」という指摘は、詩人であり文学に造詣の深かったボーレン先生らしい鋭い着眼点

B) 四つの歩み

第一に 説教の根拠を問う。

説教の根源と同時に根拠（権利根拠、合法性）を表現することを試みる。

— 第二部 説教の根拠

第二に 説教の言葉の内容と形態を問う。

み言葉の持つ時間形式をとり上げ、説教行為の構造を明らかにすることで、言葉の内容と形態を問う。

— 第三部 言葉の時間形態

第三に 説教者が自分の人格により、説教の出来事をどの程度規定するのか、問う。

❑ 言葉の出来事には、語る人間が不可欠。

— 第四部 説教者

第四に 説教が向けられる者を問う。

❑ 説教は常に誰かを目指して行われる。

— 第五部 聞き手

人間の言語によって神の言葉が行われるということ、つまり、一人の人間がこの言葉を人間に対して語る語り手となる、という秘儀をこの四つの歩みで叙述しうる、と考える。

この四つの歩みは、常に同じ出来事について語る。説教の奇蹟を四つの側面から考察する。

C) 四つの局面が与える自由と不自由

👉の四つの局面は、説教者に自由を保証するか、自由を妨げるかのどちらか。不自由は、「一つの面が見過ごしにされたり、圧迫され

たりする場合」か「一つの局面が絶対化されたり強調される場合」という二つの性格を持つ。

説教は、自分が何を根拠とする（第一の道）のか知らないなら、説教が語る内容（第二の道）について明確でないなら、語り手そのものが妨げとなっていたり、聴衆に対する語り手の関係が曖昧である場合（第三の道）にも、聞くという事（第四の道）をも考慮されていないならば、不自由となる。

D) 形式と内容

説教論が、人間が為しうることに限定するなら、人間が為しうることを無視する場合と等しく、奇蹟に対立してしまう。説教論が、「説教する」ことを、神の御業として描写する時、人間もそこで何をなしうるかを忘れられてはならない。

説教論が人間がなしうることに考察を加える時にも、本当は一切が「神が語られるということ」を保持すべき。

説教とは、神が「すべての物にあって、すべてとなられる」将来に向かって語られるもの（コリント I 15：28）。



説教の形式は人間的性格を持っている一方で、説教の内容は神の言葉であるがゆえに、神的性質を持つ。■ 形式と内容を区別する事は不可能。



説教が希望の言語に奉仕するならば、形式（人間的性格）と内容（神の言葉）の分離は避けて、相互浸透のために語るだろう。「すべての者において全てになる」という神の将来を期待しつつ、内容と形式の一致を求める。「何を」という問いと、「如何に」という問いへの分裂は、奇蹟と技術との弁証法的な相互浸透を破壊してしまう。説教は、一つの事柄に仕え、人間が為す事のできない、しかも、人間になしうることを表現するのだ、という事を無視している。

「何を」という問題と「いかに」という問題の分離は、許されざる

単純化に導く。

—説教学において、形式問題を拒否し、説教が「何を」語るかだけ問うのみならば、形式が使い古され内容に即応しなくなった時、説教は仮現的になってしまう。

—説教論が、何を宣べ伝えるかを無視して、弁論術的なものに身を向けるために内容を捨象してしまうなら、説教論は「自分とは異質な律法」のために、その内容（神の言葉）を失う。

ただ神学的に、上から垂直に事柄を語る場合も、或いは、ただ人間の語ることとしてのみ研究する場合にも、いずれの場合も、単純化していることになり、いずれの場合も内容が損なわれ、言語はその自由を失う。自由と共に力も失う。説教学において「何を」と「いかに」の問題を分離して論じるなら、宣教の内容（神の言葉）は必然的に形態（説教の言葉）を見出さないの、内容としての宣教が言語を失ってしまうという危険が残る。或いは又形式が、内容を疎かにしてしまっ、空虚なままになってしまう。説教の無力とは、この関連で言えば、内容と形式との間の対応の欠如として規定することができる。

E) この説教論の構想と、A・シュヴァイツァーの構想との対比 シュヴァイツァーの構想

- ・「原理的な説教学（１）」⇔「特殊な説教学」
「内容的説教学（２）」
「形式的説教学（３）」

- ・この区分は次の説教論にも及ぶ

アルバート・シェーデリン『正しい説教』、

ヴォルフガング・トゥリルハース『福音主義的説教』

ヴァルター・ウーデザル『礼拝的説教』

- ・A.シュヴァイツァーは（２）と（３）の間には統一があることを強調。

形式は素材から展開されるものだから「説教の素材が、説教による礼拝を定めた教会政治的秩序に従いながら、説教者の人格の中で、教化の目的に向かって動く時、この素材その

ものから説教の形式が生じる」(第157節)。内容と形式は区別されるべきだが、分離することはできない。



まさしくここで我々の困惑が始まる。「内容的及び形式的説教学の区分が、実際の説教学者の意図に反して、やはり事実上、この二つの分離を生じさせるのではないか」

レオンハルト・フェント 「説教の神学と技術論」

「＜説教学＞の主要な要素は、説教論を＜弁論術一般からというのではないが＞弁論術の支配から解放することである」。最近の説教学との関連から、「最近の説教学は、先ず第一の事として、『聖書の宣教としての説教の内容を』論じ、それからやっと形式的なものを扱う。この形式的なものに弁論術は不可欠である」

→内容と形式のこのような関係規定は、満足を与えるものではなく、弁論術が再び独立するに至った。

F) 形式問題を、事柄そのものの問題として理解する事を試みる

—この説教学では、「内容的」説教学を論じるべき場所において「形式的」説教学を論じてみようとして試みている。

■神の言葉の時間形式について語る (第三部)

G) この説教学は、「現代文学との関連」に於いて書かれる。

シュライエルマッハー 説教を叙情詩との関連でみた。

「すべての完全性、[説教の] 整え方の正しさ、導入の正しさは、聖職者自身の最も深い生から生じてこなければならない。機械的な働きをするような中間的部分はここには存在しない。我々の対象としているものと、明らかによく似ているある領域との類比がある。それは叙情詩である。叙情的詩においては、およそ類(Gattung)というものは消えてしまう。叙情的構成というのは、直接的な個性的な動きから生じ、詩人がこれを叙述しうる程度に応じて、表現を見出すものだからに他ならない」(ヤーコブ・フレーリヒス編『フリードリヒ・シュライエルマッハー博士の叙述する、福音主義教会の原則に基づく実践神学の総括的叙述』1850年、326頁)。

■これに関しては、一言では答えられず、本著作を持って答える。説教の叙情詩的、劇的構造を分析することによって、説教論を一種の詩論として展開する事も可能であるが、「説教が語られるもの」（書くものとは根本的な相違がある）ことを考慮せねばならない。ジャン・パウルの『美学の予備校』の次の言葉によって歩みを進める必要がある。「**叙事詩が叙述するのは、過去から展開してくる出来事。劇的叙述が述べるのは、将来に向かい、また将来にさからいつつ広がって行く行動であり、叙情詩が語るのは、現在の中に入り込んでくる感覚なのである**」

現代文学との関連で説教を試みる四つの理由

第一) 詩（文学作品）は語りかけて来るから。

語りかけられた者としてのみ説教ができるのだとすれば、詩（文学作品）から語りかけてくるものに対して、心開くのは当然。説教者また神学者として、霊の検証をなす課題を委ねられているのだから、詩の中で語りかけて来るものが何であり、誰であるかを問わねばならない（第四章参照）。勿論、説教者として身を向けるのは聖書。詩（文学作品）は、聖書に身を向けることがその中で起こる連関である。

第二) 文学作品と説教は、同一の素材、言語を用いるから。

説教者は自分の説教を書き留めるが、それは語られるために書かれるべき。内容と形式は、語り聞くことに向かう過程の半ばで考察され、形成されなければならない。

第三) 現代の詩（文学作品）は、我々が生きており、それに対して説教せねばならない世界を、言語によって言い表すから。

詩との交渉において、我々の言葉が向けられるその世界の地平が明らかになりうる。我々の説教用語が象徴的に示している世界の喪失は、「この世が意味を失っており、沈黙していることとの戦い」を引き受けている詩との関連の中でのみ克服できる。 作家たちは自分達の仕事を脅かす危険について、

承知している。ダダイズム²以来の反芸術、反文学の存在—美的なものによって麻酔をかけられることから自分を守ろうとしている。

説教学・説教する事に於いても、美的なものの危険は鋭くなっている。**美しい説教は自己満足に陥る。**美学的なものが政治の代わり。そうした説教は、**現存するものを栄化し、「希望の神」を裏切り、現存するものという偶像に仕えるようになる、**という仕方で政治的効果を持つということが、極めてありうる。説教では、美的趣味と無意味さは提携する。説教学は、説教者自身に自由を与えるために配慮するとしても、説教学自身が（美学の）奴隷になることは許されない。説教学が、一定の文学的方向に身を委ねることはない。

第四) 現代の作家たちは、言語に対する情熱があり言語のために苦しんでいる。それは、聖徒たちが教会のために苦しむように。作家たちがこの世界の言語喪失状況の為に苦しむのは、聖徒たちが教会が教会ならざることに苦しむのと同じ。説教者がキリスト教的な日常性によって、自分の福音・自分の聴衆・自分自身の名誉を損なうようなことをしないのならば、今日の説教者は言語を無反省、無批判に使うことはできない（“キリスト教的日常性は、説教者に言語を無反省・無批判に使わせ、福音・聴衆・名誉を損なわせている”と言いたい？）

書くことと語ることの区別は消せないが、説教者にとって勧められるのは、他の人々とはくらべものにならない努力を、言語のために費やしている人々と対話すること。そのような

² ダダイズム 第一次世界大戦中から戦後にかけて、チューリッヒからベルリン・ケルン・ハノーファー・パリと波及した芸術運動。既成の権威・道徳・習俗・芸術形式の一切を否定し、自発性と偶然性を尊重。意味のない音声詩・コラージュ・オブジェ・フォトモンタージュ・パフォーマンスなどを産み、20世紀芸術の源流となる。東京・ニューヨークにも伝播（広辞苑より）

ふれあいの中で、説教者にとって、どんなに驚くべき、新しい局面が開かれるかを明らかにするのが、希望である。

H) 重要性は否定できないが、周辺の事として扱われている二つの領域

(1) 説教の歴史について

参考書

- シオンハルト・フェント「説教学」(1970年)128p以下の総括的叙述。
- アルフレート・ニーバーガール「キリスト教説教史」(『レイトゥルギア』第Ⅱ巻、181p以下所収)
- ヨーハン・B／シュナイアー『カトリック説教史』(1969年)

(2) マスメディアにおける宣教の問題

- マンフレート・ヨズツティス編『放送説教のための論文集』1967年
- オットー・B・レゲレ、G・バウアー共著「教会とマスメディア」(『牧会者のための神学ハンドブック』第Ⅱ巻第二分冊、284頁以下)
- カール・ヴェルナー・ビューラー『教会とマスメディア』1968年
- ディーク・バーケ「マスメディア」(『実践神学ハンドブック』343頁以下)
- ベルンハルト・クラウス『教会に奉仕するマスメディア・神学と実践』1970年
- エルマー・マリア・ローレー『宗教的情報のメカニズム・マス情報の過程における教会』
- ヴィリー・マッサ「説教類型論B、マスメディアにおける教会の言葉」(『宣教ハンドブック』第Ⅱ巻、278頁)